

三重県審査 優良賞

「私たちはコロナ禍で何を得たのか」 2年 渥美 璃子さん

(『この夏の星を見る』辻村深月著 KADOKAWA)

私はコロナ禍で一体、何を失ったのだろう。長かったコロナ禍が終息に向かい、元通りの生活に戻りつつある今、そんなことを考えていた私は、書店で本書と出会い、考えを一変させることになった。

私自身もコロナによる様々な制限の為に思い描いていた中学校生活が送れなかったこともあって、亜紗たちが抱えた不安や葛藤、行き場のない怒りを痛いくらい理解することができた。春の一斉休校から始まり、会話の制限、部活の中止、学校行事の中止。今まででは考えられないような異常な生活が始まった。学校生活は私の青春そのものであり、今しかないかけがえのないものであったが、コロナはそのほとんどを一瞬にして変えてしまった。何もできない新たな日常にも慣れ、部活の大会が中止になっても、コロナだから仕方がない、別に自分たちは全国大会に出られるほど強かったわけでもないし、と自分に言い聞かせていたあの頃の私に、一つ届けたい言葉がある。それは亜紗がコンクールが中止になった友達にかけた「悲しみとか、悔しさに大きいとか小さいとか特別とかないよ」という言葉だ。私はこの言葉に感銘を受けた。強豪校だけに悲しむ権利があるわけではないし、そういった感情はほかの誰とも比べるものではないと気づかされ、自分の気持ちに素直に向き合うことがいかに重要かを知るきっかけにもなった。

また、長崎の五島に留学している小山が、「会いたい時に家族にも会えないのか」と腹を立てる場面には強く共感した。コロナに罹らないこと、健康でいることは確かに大事だが、それを守るために多くの大切なものを犠牲にしたら、人間は何のために生きているのか分からなくなった。誰も悪くないことくらい分かっているが、それでもコロナの理不尽さには、言いようのない怒り、悲しみを感じずにはいられなかった。

コロナ禍で不満を募らせる一方で、私は今まで当たり前だと思っていた日常がどれだけ幸せだったのかを知ることができた。いつでも自由に会えること、マスクで顔を覆われていない友人の笑顔を見られること。それらはちっとも当たり前のことではなく、感謝すべきことであると学んだ。私にとってコロナ禍はコロナ前の日常の価値、尊さを改めて考えるきっかけにもなった。

私は本書を通して、作者の辻村深月さんが読者に問いかけたかったのは、コロナ禍で私たちは本当に「失われた」のか、ということであると思う。この問いについて考えた時、私は最近の新聞やニュースでコロナ禍が「失われた三年」と称されていることに違和感を覚えた。たしかに、コロナによって失われたもの、奪われたものは数多くあるが、だからといってこの三年がなかったかのように言われるのは心外である。誰もが初めての状況で、皆で模索して作り上げた三年間。そこには時間も経験もあったのだから。また、コロナ禍

で学校生活を送った私たち学生が、周りの大人たちに「今の子どもたちは可哀想」と言われることにも疑問を抱く。コロナ禍の学生はただ可哀想だったわけではない。出来ない活動が多かったのは事実であるが、限られた状況の中で自分たちにできることを探して、精一杯楽しんだ。悔しい思いは、たくさんしたけど、私は自分を可哀想だとは思わない。

「失うものがあれば得るものだってある」と吉田兼好の言葉にもあるように、コロナ禍で多くのものを失った私たちには当然得たものもある。一つは先程も述べた、日常の価値や尊さについて考える機会だ。身近なところにある幸せをつい当たり前のことのように感じてしまう私たち人間にとって、これは良い機会だったと感じた。もう一つは、遠く離れたところにいる人と簡単に繋がれるようになったことだ。これはコロナ禍でオンラインで話すという選択肢が主流となったことで生まれたものである。亜紗たちもコロナ禍で近隣の学校を招いて開催していたスターキャッチコンテストが以前の形では行えなくなったことで、オンラインでの開催を決め、結果的に日本中の人と同じ空を見ながら観測することができた。コロナがなければ、亜紗たちがこの大会をオンラインで開催することはなかっただろうし、そうなれば大会を経て絆を深めたこの学生たちは、そもそも知りあうことすらなかっただろう。そう考えると、コロナも悪いことばかりではなかったと感じた。起こったことに対して何を失ったかばかりを考えるのではなく、何を得たのかを考えることが一番大切だと気づかされた。これからは思考を切り替えて、少しでも自分が前に進めるようプラスの考え方で今後の人生を歩んでいきたい。本書と出会ったことで私はそんな風に考えられるようになった。